RIKKYO MOVE
More Valuable Education
立教大学　大学教育開発・支援センター
Newsletter
Center for Development and Support of Higher Education
28

開催報告

春学期FDプログラム

「反転授業のつくり方と実践事例」

［2022年7月14日］

大学教育開発・支援センターは、反転授業（従来、教室で行われていた講義を中心とする授業学習と、演習や課題などの授業外学習とを入れ替えた形態の授業）について教職員の理解を深めることを目的として、春学期FDプログラムを開催しました（於Zoom）。登壇者として、反転授業に造詣が深い田口真奈先生（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）、および、立教大学で反転授業を実践されている小野正芳先生（日本大学商学部教授／経済学部兼任講師）をお迎えしました。50名を超える皆様にご参加いただきました。

田口真奈先生

田口先生には、「大学教育における反転授業導入の目的と意義」と題してご講演をいただきました。反転授業のメリットとして、従来の授業よりも対面授業の時間を理解の深化のための活動に使うことができるため、学習者はより深く授業内容を理解できうることが挙げられました。その上で、学習が起こるプロセスに関する理論をご紹介いただきながら、反転授業をデザインするためのコツとして、対面授業でどのような時間を増やしたいかを考えること／学生の動機づけを意識して事前学習教材を作成すること／対面授業中に事前学習で取り組んだ内容が何度も活用されるようにすること等を解説いただきました。

小野先生には、「立教大学における反転授業の実践―「中級簿記1」を事例として―」と題して事例をご紹介いただきました。小野先生は、「中級簿記1」の一つのクラスを従来の形式で、もう一つのクラスを反転授業の形式で実践されています。反転授業を実践して感じている意義として、より上級の学びを求めている学生に対応しやすいこと、対面授業中により高度なあるいは実践的な事柄を多く扱えること等が挙げられました。その一方で、反転授業において出席率が低下傾向にあり、さらに事前に動画視聴してくる学生が少ないといった課題に直面されていることもご紹介いただきました。

小野正芳先生

田口先生、小野先生によるご講演の後には、両先生方によるディスカッションが行われました。具体的には、動画視聴率の低迷という課題について、反転授業においては初回が重要であり、「動画を視聴してこなければ、対面授業に参加する意味がなくなってしまったり周囲の学生に迷惑をかけてしまったりする」と強く伝える必要があると、田口先生よりコメントがなされました。また、反転授業では学習時間が増えるため、目標や評価方法の設定についても改めて考える必要があると意見交換がなされました。

質疑応答の時間には適切な事前動画の長さ等に関して議論が交わされました。全体を通じて、大学の授業の場は、知識の修得だけでなく、動機づけたりあるいはアウトプットをさせたりする場であるべきでないか、そうした場を実現するために反転授業は有効な一つの手段ではないかと考えさせられる内容となりました。

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めましてお礼申し上げます。

助教　江幡 知佳

次ページ「立教大学における国際化の取り組み
―GLAP（グローバル・リベラルアーツ・プログラム）―」インタビュー

お知らせ 当センターとメディアセンターから〈本学教職員向け〉

動画『反転授業のつくり方と実践事例』
上記FD講演会の動画を公開しました。
ページはこちら〈本学教職員限定〉➡ https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/online_class_information/SitePages/training_session.aspx#anc08

Canvas LMS運用開始
2023年度春学期より新・授業支援システムとして「Canvas LMS」の本格運用を開始します。
なお、Blackboardは2023年度末にサービス終了となります。詳細はこちら ➡ https://spirit.rikkyo.ac.jp/canvaslms/SitePages/index.aspx

Rikkyo Education

Rikkyo Educationは、立教大学で行われている授業実践や教育上の取り組みを紹介するコーナーです。今号では、立教大学における国際化の取り組みとして「GLAP」を特集します。運営センター長である松井秀征教授、実際にTutorial科目などを担当されている中込さやか特任准教授と大橋里見特任准教授に、英語でのリベラルアーツに関する授業実践や、教育力向上のためのFD、今後に向けた課題などについてお話をうかがいました。

立教大学における国際化の取り組み ーGLAP(グローバル・リベラルアーツ・プログラム)ー

松井　秀征 教授（GLAP運営センター長・法学部国際ビジネス法学科）
中込さやか 特任准教授（GLAP運営センター）
大橋　里見 特任准教授（GLAP運営センター）

GLAPの特徴

2017年に開設。1学年30名程度という少人数制をとり（入学定員と専任教員比率が6：1）、英語でのリベラルアーツ教育が展開されています。2年次秋学期から1年間の海外留学を経たのち、「Humanities」「Citizenship」「Business」の3分野から一つを選んでより深く学び、4年次に卒業論文を執筆します。

GLAPのカリキュラムについて

――GLAP は 1 学年 30 名程度の少人数教育が特徴であると思いますが、その特徴を生かしてどのようにリベラルアーツを重視したカリキュラムを展開しているのでしょうか。

松井　少人数教育でありますから、どの科目でも、ある程度双方向性が担保されていると思います。つまり、教員と学生との距離が近いということです。学生からすると、教員から問いが投げ掛けられ、常に考え発信するという能動的な取り組みが用意されています。

リベラルアーツとはそもそも何なのかということですが、世界をどう認識し、どう意味付けをし、そこに対して自分がどう働き掛けていくかという、まさに世界の認識学みたいなところがあって、幅広い教養も必要です。それに対して自分の意見も加えていかなければいけないと思います。2 年次秋学期から 3 年次春学期までの留学を経て、「Humanities」「Citizenship」「Business」の中から自身の専攻を決定し、それぞれの専門性の中で自分のテーマに従って研究をしていくという点（レイトスペシャライゼーション）は、他の学部と比較して GLAP の特徴と言えるのではないかと思います。

松井 秀征先生

中込　大学でリベラルアーツを学ぶことの意味については、「Liberal Arts in Higher Education」という科目の中で、GLAP の1年次学生全員が春学期を通じて集中的に学びます。GLAP で学ぶにあたって考えてほしいこと、実践してほしいことなどを授業の目的や内容に組み込んでいます。授業内では、事前のリーディングに基づき、クラスやグループ単位でディスカッションをし、教員から学生、または学生から学生へフィードバックを行います。古代ローマやギリシャの時代にさかのぼり、そこから中世ヨーロッパ、近代ヨーロッパ、イングランド、アメリカ、最終的に日本の近代から現代と、その時代ごとに「リベラルアーツとは何か」「リベラルアーツを学んだのはどのような人々だったのか」などの問いについて考えていきます。例えば、リベラルアーツはより哲学的、学問的であるべきなのか、あるいはより専門的、実践的になるべきなのか、実社会に活かせる技能、プラクティカルなものであるのかなどという問いは繰り返し現れますが、時代や地域が異なると主流となる見解が変わります。一連の作業を通じて、学生には「自分はなぜリベラルアーツに価値を見いだして GLAP に入学してきたのか」という問いについて考えてほしいと思います。

大橋　少人数制でリベラルアーツ教育ということを考える際に、一つはクリティカルシンキングということと、もう一つは、双方向的なアクティブラーニングということが学習の重要事項として挙げられます。リベラルアーツ教育では、いわゆる小さいクラスの中で双方向的にアクティブに、みんなが、批判的な観点を持ちながら議論を繰り返すことによって柔軟な発想が育まれます。また、さまざまな分野の異なる知を用いながら問題解決に対応できるような基礎、知識、体力などを身につけつつ上級学年に進んでいきます。

――「Tutorial 1・2」では、学生はどのような学びを経験していますか。

中込　「Tutorial 1・2」は、最大でも5名という非常に少人数の科目であり、そこに教員が加わって全 6 名程度の密なコミュニケーションのもとに行われています。こちらは 1 年次春学期および秋学期に展開され、各学期に 2 冊ずつのテキストを読みます。テキストは「Humanities」および「Social Sciences」に関連する書類の中から担当教員が合議した上で 4 冊決めています。学生の反応を聞きますと、非常に読む分量が多い、あるいは専門的な内容の入門編なので難しいなどというコメントはあります。しかし、少人数ですので教員のフォローや学生間の協力もあって、おおむね問題なく運用されているのではないかと思っています。

――海外の協定校への留学「Study Abroad」を通じて学生には英語でのコミュニケーション能力以外に、どのような能力を身につけてほしいと考えていらっしゃいますか。

松井　学生は 1 年半、GLAP における教員とのやりとりの中で、ものの見方、考え方、そして発信の仕方を学んでいきます。それらを、日本語で構成されたのではない世界で使ってほしいと考えています。つまり自分たちとは異なるものの見方やバックグラウンドを持った人たちの中で、自分たちが GLAP で培った能力を発揮できるようになってほしいと思っています。そういった場面では、まさに多面的にものを見たり、発信したりという能力が必要になってくるのです。留学中、そういうことを繰り返す中で、個としての能力をさらに高めてほしいと思っています。

大橋　まさに今、松井先生がおっしゃったように、普段、自分がいるエリアから出て、異なるものに出会ったときに、そこを理解するだけではなくて、新しい価値観みたいなもの、それこそグローバルに共有できる価値観を発信できる人になってほしいと思っています。

英語のコミュニケーション能力も非常に重要で、若い柔軟な頭のうちにどんどん身につけてほしいと考えています。日本の中で英語トラックで必死に勉強していくのは非常に大事ですが、語学力を応用するということになると、やはり、現地（語を話す場所）に行くということが重要になってくると思います。留学も絶好の機会として活かし、コミュニケーション能力を高めていってほしいと思っています。

中込　GLAP における「Study Abroad」は特にコロナ禍など事情がなければ、2 年次秋学期と 3 年次春学期に実施されます。これは RIKKYO Leaning Style における形成期に重なります。また、GLAP の学生には「Study Abroad」中の最後のタイミング、3 年次 6 月に、「Humanities」「Citizenship」「Business」の 3 分野のうちどれを専攻するのかを、留学前や留学中の経験を振り返った上で選択してもらいます。その選択を受けてアドバイザーに確認を取り、専攻を最終決定します。留学中にさまざまな経験を得て、ものの見方や問題関心が変わり、留学前に志望していたものとは違う分野を選択するケースも見られます。

留学から戻ってきた学生と面談をすると、留学で得たことを踏まえてどの分野を選択するか、卒業論文のテーマを何にするか、自分の将来をどうしたいか、より具体的に考えられるようになっている学生が多いです。一皮むけて帰ってきてくれる学生が多いので、効果的なタイミングで 1 年間の留学を体験することが大きな経験になっているのだろうと思います。

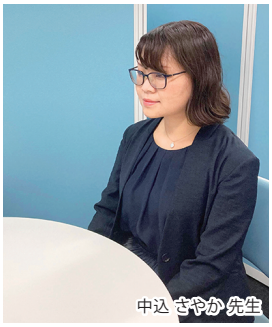
GLAPを支えるスタッフについて

――英語による少人数クラスを運営していくにあたり、実施されている FD がありましたら、その内容を教えてください。

大橋 里見 先生

大橋　GLAP の設立当初、最も問題になったのが、いわゆる講義型ではない授業をいかに実施するかということでした。英語能力は十分身についている。という前提で、それ以外に、いかにディスカッションをうまく回していけるか、あるいは双方向の授業の中で、教員がいかに柔軟に対応していけるのかが重要になります。そうした形態の授業を実施する際に必要なスキル等を習得するための FD を実施しました。授業の展開上、講義型とアクティブラーニング型どちらがいいのかというような問いを立てながら、教員の中で議論を交わしました。そして GLAP でアクティブラーニングを実施する上で参考になる事例や方法について、アメリカで長く教鞭を執られた先生を講師に招き、議論を行っています。

―― GLAP において、アカデミックアドバイザーの先生はどのように学生に関わっていますか。


中込 さやか 先生

中込　繰り返しになりますが、非常に少人数ですので、学生と教員との密なやりとりを通じて、お互いをより深く知ることができます。入学から卒業まで、学生間もお互いに付き合いが深まりますし、教員と学生の間も顔が見える付き合いができます。コース内容自体が 1 年次から 4 年次へと有機的に連携すると同時に、指導する側も一貫して指導ができます。より密に学生の問題関心に応じてサポートすることを心がけています。

また、教員自身も中心となる専任のスタッフ数が少ないので、適宜、情報共有をしています。連携を密に取りつつ深く指導ができるというところは、利点になっているのではないかと思います。

今後の課題や変化について

――国際化を推進していく際には、日本語を流ちょうに話せない留学生の受け入れなど、いくつか難しい点もあると思います。GLAP は現在どのような課題に直面していて、そうした課題に対してどのような取り組みをなされていますか。

松井　実は GLAP にいる学生は、ほとんど日本に何らかのルーツがある学生です。そういう意味でいいますと、今後、例えば PEACE プログラムという、まさに必ずしも日本にルーツがない学生が入ってきたときに、そこをどう統合していくかというのは、これから出てくる問題としてあるだろうという気がしています。

もともと立教大学では 4 月スタートでカリキュラムを組んであるので、国際化を推進していくにあたり 9 月に入ってくる学生を、どのように適応させていくかに関しては、課題があります。恐らく GLAP に限らず、そして立教大学に限らず、4 月スタートをベースに出来上がっている日本の大学の仕組みの中で、外国にルーツがあって 9 月に入学してくる学生をどう受け入れていくのか、カリキュラムや事務体制のことから、先ほど言った留学などの仕組みも含めて全てどう個別対応をしていくのかなどは大きな課題です。

――新型コロナウイルス感染拡大前と現在を比較して、GLAPの取り組みの中で大きく変化したものはありますか。

大橋　コロナを経て今後ということでいいますと、いわゆるハイブリッドとかミックスとかそういったタイプの授業形態を、いかにうまく取り入れていけるのかということは、ポイントになるだろうと感じています。さまざまなデバイスを使いながら、いわゆる対面だけで実施しないような授業も必要になってくるだろうと思います。場合によっては、反転授業をうまく使いながら、いかにその効果を別のクラスの中でのディスカッションに組み込んでいくのかなどが求められるのだと思っています。

ただ、コロナを経て、学生を含めてあらためてみんなが実感しているの

は、対面の良さです。クラスの中で、face to face で向き合いながら話をすることの重要性が、授業の中で非常に大きく感じられます。将来に向けていろいろな新しい試みもしていく必要があるとは思いますが、人と人が直接、顔を見ながら目を見ながら話をしていくということを、もう一度レビューしながらやっていく必要もあるのではないかと思っています。

中込　もともと GLAP はコロナ以前から、Blackboard（LMS）や立教時間（e ポートフォリオシステム）、Google スライド等、オンライン授業でも使用可能なシステムを積極的に活用していました。コロナ禍ではその経験を活かして、またそれをさらに加速させるかたちで Zoom を用いた、リアルタイムのオンライン授業を実施しました。移行に際して、もちろん困難は多くありましたが、事前の積み重ねを活かせたのではないかと思います。対面授業に戻った後も、Zoom は、アカデミックアドバイザーによる面談をより柔軟に実施するために使用しています。また、授業内で学生のプレゼンテーションの報告をする際に画面共有機能を活用しています。便利なものは、対面であっても柔軟に使っています。

ただ、大橋先生もおっしゃったとおり、大学の 1 年次でまだ学習環境が整っていない学生や 4 年次以降に卒業論文の執筆を控えている学生に対しては、対面指導が重要になってきます。授業外でちょっとした情報交換をしたり会話をしたりという、ソーシャルな面が教育効果にとても大きく影響するというのもコロナを経て認識することができました。

――立教大学の教育の特色の一つであるリベラルアーツの考え方をどのように重視、反映しながら、先生方は全学共通科目や専門科目の授業を展開していったらよいでしょうか。アドバイスをお願いいたします。

松井　ご質問と少しずれてしまうところがありますが、授業を担当される先生方がリベラルアーツとは何かを意識できるように、まずは大学側として、その考え方を繰り返しお伝えして、浸透させていくことが大事だと考えています。各教員が全学共通科目や専門科目で扱っている主題について、その授業で、今あるわれわれの世界の何を解き明かそうとしているのか。どのようにすれば、その主題の本質にたどり着くことができるのか。そして、学生がどのようにすればその内容を内面化し、自らの言葉で発信できるようになるのか。これらの点について、大学としても常に発信をしていきたいと考えていますし、先生方にも意識をしていただきたいと思っています。

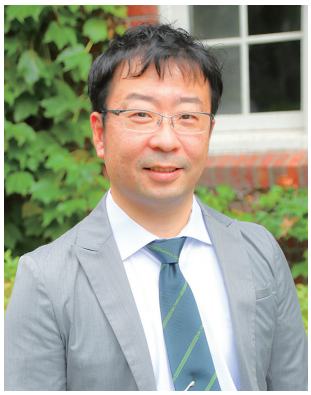
インタビューまとめ：助教　神田 恵美子

新・副センター長あいさつ

当センターでは今年 4 月より、副センター長が交代しました。以下に、新・副センター長からのメッセージをお届けします。

副センター長・TL(Teachinng＆Leaning)部会長

佐々木　直樹（理学部准教授）



本年 4 月より、副センター長・TL 部会長を務めております。私は本学に着任してまだ 3 年目ですが、これまでに複数の大学（国立 1 校、私立 3 校）での教育経験を有しておりますので、その経験を買われたのかもしれません。

さて、大学には多様な価値観が共存し、学生はその中で自身が進む道を見いだしていくものと思います。これは教員にも当てはまることで、様々な教授法の中から、その科目にふさわしいものを採用しているかと思います。しかし、従来は存在しなかった新たなツールが利用できるようになった時に、それを活用することが、みなさんはどれくらいできていますでしょうか。興味はあるけれどもなかなか…という方も少なくないのではと想像します（私もその一人に分類すべきと思います）。

本稿で先生方にお願いしたいのは、このようなツールをまずは試していただいて、その上でどう活用するかを考えていただきたいということです。すでに実現できている良い教育をやめる必要はありませんが、学生も社会も時代と共に変化していくことを踏まえれば、常にベターな教育を目指す努力はあって然るべきと思います。学生がより深く豊かに学んで社会に羽ばたいていけば、教育機関としての大学の役割を、より良い形で果たすことになるのではないでしょうか。

TL 部会では本年度も様々な情報発信に努めてまいります。当部会の取り組みが、先生方の授業改善の一助となれば幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。

編集後記

今年4月より助教を務めております神田恵美子と申します。教育学の中でも、教科教育（国語教育）分野の「聞くこと」の能力開発を専門とし、「自己調整学習論」に着目して研究しています。本学の授業改善・学びの質向上に貢献できるよう、授業実践に関する有益な情報を発信してまいります。

「MOVE 第28号」
立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2022年9月27日発行
発行　立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel：03-3985-4624　Fax：03-3985-4615
E-mail：cdshe@rikkyo.ac.jp
https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html